

笠原・増田両氏の「台風論」をみて気になったことがあるので書きとめておく、79頁に台風の蛇行経路の例としてフロシー・クラフ両台風の経路図が、かかっている。この名前は引用文献の著者名で、必ずしも図のオリジナルな筆者ではないのかもしれないが、引用文献の著者がオリジナルな筆者と大部分重なっている場合は、紹介者と原著者が混同されるおそれが多分にある。この場合3氏は理論を実証するために予報課の現業で観測データから帰納的にきめた結果を引用したにすぎないのだが、単にこのように書いてあると、3氏がきめたように誤解する人も多いであろう。25頁の軍艦那智の気圧記象に（荒川）とある場合は、紹介者と原著者とを混同することもあるまいが、本文中のサフィックスで荒川の論文は容易に見出せるのであるから、ここからここに名前を書く必要はないので、むしろ名前を書いたための混乱の方が大きいのではないか。102頁にのせられた38年6月29日の唯の天気図に（高橋）と書いてあるのも奇妙である。

これほどまでして引用文献の著者名にこだわっておきながら、112頁の室戸台風の際の大阪湾の圧流状況の図には、原著者がわからなかったためか、名前は何も書いてない。これだけの結果を得るには大へんな手数であったろうが、残念なことに著者名は何も書いてない。大したことはないかもしれないが日本の本は割合この点ルーズであり、外国のものは少し厳格すぎるぐらいやかましいのではないか。（S.Q.S）

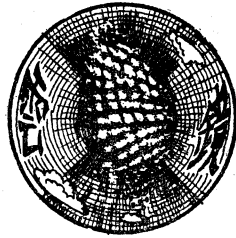
予報に確率4つあり！

先号の本誌に予報の点数について興味ある提言があった。絶対的な予報の%は本当は4つあり、曰く『「明朝の気温は5°C」という仮説の確率は $\alpha=60\%$ である」という気象庁発表は $\beta=95\%$ の信頼度で一般にうけ入れられ、「5°Cでない仮説に関する確率は $\gamma=10\%$ である」との同時発表は $\delta=99\%$ の信頼度でうけ入れる』と。これでは大抵の人は狐につままれたみたいで結局「これなら当り外れの分らぬ逃げ手つきの予報だ」と皮肉られるだろう。

ところがこれは第1種 2種の誤りという点を絶対的に表わす処から考えられることで、許容限界といわれる。第1種の誤りに2つの%、第2種についても2つの%が考えられ、計4つだが、普通は $\alpha=60\%$ だけで $\beta=100\%$ と仮定し、 γ, δ への考慮をしない。というより近代統計が完全にそこまで発展していない。厳格に4つ%付予報が理想として望ましい。こうすれば、ク・サ・キ氏が心配されるような $\alpha=100\%$ 適中率の予報が外れても β, γ, δ が控えており、それらの奥の手で説明が付き逃がれる(?)ことができる。第1種の誤りだけでなく、第2種の誤りも明確につけたいもので、こうなると堂々と予報官の大舟にのってそれらの%で何とか説明つけて失業の心配はない。ク・サ・キ氏の提言は立派なものです。大いに主張されたい。（鈴木栄一）

気象外史における台風名第一号

日本の気象史に仮に気象正史（官側）と気象外史（民間側）とがあるものと仮定するならば気象正史における台風名第一号は大正11年8月26日の「新高台風」（大谷東平博士著台風の話60頁参照）であろう。そこで筆者は気象外史における台風名第一号はないものかと思ってみたのであるが、枕崎における有名な「6月流れ」（天気第2巻第5号、明治時代の台風「6月流れ」参照）は確かに台風名であると思うのである。しかしこの台風名は遭難の意味が含まれているので、第二義的の感じはするけれども「6月流れ」は「6月時化」又は「6月台風」と言う意味を表現していることは間違いないと考えられる。見聞の広からざる筆者は明治時代およびそれ以前の気象災害史には、台風名があったかどうか良く知らないが、この「6月流れ」は気象外史における台風名第一号ではなからうかと思うので、此に提言してみる次第である。如何なものでしょうか？ 気象学界における諸先生方の御教示を仰ぐ次第である（枕崎測候所、伊集院久吉、旧姓茶屋道）



メンデル・モルガンの遺伝学と、ルイセンコ・ミチューリンの遺伝学との論争を眺めていると、門外漢にはよく解らないが、後者では学問の価値判断が、實際上農業生

産にどれほど役に立ったかという点に置かれているのに反して前者では理論体系の厳密さに置かれているように思われる。日本などでも、ややもすると学問がある一部の人の専売になる傾向がなしとしないし、またこれをアカデミズムと称して颯迎する傾向もあった。もちろん学問である以上は、理論的にはあくまで厳密でなければならぬ。しかしそれだけではもの足りないのであって、やはりそれに伴って国民の生活なり、文化なりが向上してゆくのでなければおかしいのではなからうか。博士の数が多くなっていても、文化の方がおきざりになっているのでは、どこかで歯車が食い違っているような気がする。

気象の場合でもその経済効果がいつも問題になるが、よく判らないというのが結論である。いままでの気象の進歩が、天気予報の適中率を少しでもよくすることに置かれていたことはよい。しかしもう一步を進めて、国民の生活なり、生産力なりにもっと食い入った方面にまで気象の分野を拡げた時に、気象の新しい分野を開くことができるばかりでなく、国家なり国民のための気象学が確立されるのではないだろうか。（T. A）